

日本語文法(史的研究)

小田 勝

前号(97号)以後の2013-2015年の研究動向について述べる。今期、富岡宏太氏の中古語の終助詞に関する一連の論考に注目させられた。「中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ」(『日本語の研究』10-4, 2014.10)は、「体言かな」が聞き手・時制の制約なく用いられるのに対し、「体言や」は現場即応的であると述べる。「詠嘆」と対話・独話(『国語研究』78, 2015.2)は「かな」が対話・独話の双方で用いられることを示す。そのような終助詞は現代語では珍しい。氏にはほかに「よ」についての論などもあり(『国語研究』77, 2014.2、『國學院雑誌』115-5, 2014.6)、今後の発展を期待したい。古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門』(吉川弘文館2013.9)は入門書の体裁をとってはいるが、漢文訓読体の文語文の解釈上の盲点を突いた非常に重要な指摘に満ちている。管到の問題、「是ヲ以テ」が「以是」「是以」のどちらかわからないなどの原漢文不在に起因する問題や、仮定表現の「…ヲシテ…セシメバ」に使役の意はない(漢文の「使NV」が使役・仮定の両方に用いられるため)など解釈上の留意点を説く。漢文訓読体の文語文の詳細な記述・解釈文法書の整備が必要であると痛感した。

古典の本文関係では、加藤昌嘉『源氏物語』前後左右(勉誠出版2014.6)、中川照将『「源氏物語」という幻想』(勉誠出版2014.10)、『新時代への源氏学7 複数化する源氏物語』(竹林舎2015.5)など。古

典文法の研究者も、古典文学作品の本文とはいかなるものであるかについて大いに考えさせられる。

ところで、私には古典文が読めないという泣き出したくなるような飢餓感があるが、この感覚は共有されているのだろうか。『リポート笠間59』(2015.11)は古典の現代語訳についての特集号だが、その点で楽天的にみえた。「読めない」という意味は古典文について文法的に複数の解釈が成立して一つに確定できないということである。拙著『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院2015.4)では源氏物語の1文を5通りに解釈してみせた(714頁)。源氏物語冒頭部の「あいなく目をそばめつつ」にしても、状態修飾、内容補充、評価誘導、程度修飾等何通りにも解釈可能である。前記の書名「複数化する源氏物語」とは本文についての謂であるが、一本を読み進めていく中でも複数解を保留したまま読んでいくしかない、ということはどう考えればよいのだろうか。古典文について現在大規模なコーパスの構築が進行中で、やがて構文情報も付されるといふ。では「サテ行ク程ニ、亦狐^あ値ヒヌ」(今昔物語集5-20)は何格か。伊勢物語の「修行者^ぢ会ひたり」同様、普通は主格と考えるだろうが、後文には「…行クニ犬^い値ヒヌ。」と出る。格一つ決められない。解釈文法研究が不振になって久しいが、我々には古典文がよく読めないのだということを肝に銘じていたい。副題を割愛しての題目引用、ご寛恕を乞う。

(國學院大學)